

第五話 五年後

八月……

それは、学生にとっては、長い夏休みの真っ最中。

けれど、社会人にとっては、ただの暑い平日

「ね、倫也くん、ここの麻由里の台詞、明らかに辻褄合っていないんだけど」

「えええええ～、またあああ～!？」

「というか全体的に口調がバラバラなんだけど、これ本当にこのまま使うの？ このシナリオを書いた会社、とても仕事の質があれじゃない？」

「……まあ、だから途中で切られたんだろうけどな」

「どれどれ……？ あはは、ホントだ～。これならあたしが書いた方がまだマシなレベルじゃん？」

『う～ん、どうやらキャラシナリオに関しては、全部一から起こした方が早いかもしれないね……』

「んなこと言っただってローンチの六〇キャラ分だぞ!? あと一週間でどうやって巻き返せって言うんだよ！」

「……ちなみにデザインのの方は、その六〇キャラのうち、五キャラ分のラフがあるだけなんですけどね」

「い、出海ちゃん……？」

「ああああっ、もうっ！ 使えるかもしれない素材があるだけ幸せだと思っ
てくださいよっ！ わたしなんか、わたしなんかあああ～！」

「きゅ、休憩！ ちょっと休憩入れよう！ 今すぐ下からアイス持ってくるから！」

そんな猛暑に対抗すべくエアコンをガンガンに効かせた室内には、けれど
このような修羅場然とした熱い空気が流れていた。

そう、ここに集うのは、季節も時間も問わず、何年も、苦楽をともにした
仲間……

同人ザ・クル……ならぬ、『株式会社 blessing software』の、けれど同人
時代と変わらぬメンバーたち。

……そう、お馴染みのメンバーなので、先程の各々の発言が誰のものだっ
たかは読者の皆様の方でしっかり感じ取っていただきたい。

「ま、それはともかくさあ、そろそろここも手狭になったよね～」

と、一人で広々とベッドを占拠しつつ、呑気に言い放つのは、氷堂美智留。

『株式会社 blessing software』の従業員でありながら、メジャーデビュ
ー間近の人気アーティスト“mitchie”としての顔も持つ、楽曲関係のスペシャ
リストにして、社内一の空気の読めなさを誇る貴重な戦力だ。

「そ、そうですね。わたしはいいんですけど、いつまでもお兄ちゃんだけ
ネット参加っていうのも……」

と、室内唯一の作業机と椅子を占拠しながら作業しつつ、申し訳なさそう
に恐縮するのは、波島出海。

『株式会社 blessing software』の従業員でありながら、商業イラストレ
ーターとしても本名で活動している、会社を代表するクリエイターにして、社
内一の気遣いを誇るガチで貴重な戦力だ。

『まあ、僕がオフィスになかなか顔を出さないのは、狭さの問題だけじゃ

ないんだけどね』

と、室内にすら存在せず、パソコン画面から声だけで発言しつつ、微妙に挑発的な態度を取るのは、波島伊織。

『株式会社 blessing software』の取締役兼、プロデューサーとして辣腕を振るう、営業、渉外関係のエースにして、社内一の剛腕を誇る裏で貴重な戦力だ。

「そうだよ、そういうことを嫌味っぽく言って場の空気を乱すからだよね」

「め、恵……？」

と、テーブルに正座したまま資料を読みふけりながら、フラットを装いつつ完全に挑発に乗ってしまうのは、加藤恵。

『株式会社 blessing software』の取締役副社長として、表に出ない様々な業務を粛々と遂行する、社内一の実務能力を誇る影で貴重な戦力だ。

あ、ついでに、今、その恵の隣でビビっていたのは、『株式会社 blessing software』の代表取締役、以上。の安芸倫也。

「ま、まあ、場の空気はともかく、確かにもう同人サークルじゃないんだし、いつまでも俺の部屋で開発ってのもなあ……」

「そ〜そ〜、曲作るにしてもさあ、あんまジャカジャカ鳴らしてると皆の迷惑になるし〜」

「氷堂さんが周りに遠慮してるところって一度も見たことないけど……」

「椅子も一つだけすもんね。それも、だいたいわたしが使わせてもらっちゃってるから逆に申し訳なくて」

『ま、僕も本当のところ、会議スペースなんかは欲しいと思ってるけどね』

「そうだったんだ……皆、実は苦労してたんだな……わかった！」

と、皆が狭いと言っているにもかかわらず、倫也は派手な動作で周囲を押しつけるように立ち上がると、恵の邪魔そうな視線をものともせず、力強く拳を振り上げる。

「よおおお〜し！オフィス借りるぞおおお〜！」

「トモおおおお〜！」

「社長おおおお〜！」

「……今作ってる作品のギャラが入ったらなおおお〜」

「ともおおおお……」

「せんばああい……」

……しかし、その力強い宣言による盛り上がりは、契約書類の端っこにもおのずく小さい字で書かれるような特記事項により、あっという間にしぼんでいく。

「だ、大丈夫大丈夫！今年中にはサービス開始って話だし、となれば来年からは毎月レベニューシェアが定期的に入るから。そしたら……」

「そもそもの話、レベニューシェアが入ってくるほど当たるのかなあ？このゲーム」

「えっ」

「えっ」

「め、恵いいい〜……」

そして、そんな空気を必死にリカバリーしようとした社長(倫也)に、副社

長(恵)の狙いすました氷の刃が突き刺さる。

なおレベニューシェアとかいちいち説明しないので、わからない人は各自調べてください。

昨年、同人から商業へと華々しく起業した『株式会社 blessing software』が現在手掛けているタイトルは、とあるソーシャルのリズムゲームだった。

それは、前年スマッシュヒットした、アイドルを主役に据えたアニメ作品のメディアミックスの一環で、アニメに登場したアイドルグループに加え、更に六〇人以上の新キャラを追加した、かなりスケールの大きなビッグタイトルという触れ込みだった。

そのゲーム開発の中で、倫也たちメンバーが任された仕事は、キャラクターコンテンツ全般にわたるもので。

すなわち、アイドルのキャラクター作成（設定、デザイン）、シナリオ作成（メインシナリオ、キャラシナリオ）という、“ゲームシステム以外ほぼ全て”という大仕事で。

それは、規模の大小はさておき、元々シナリオやグラフィックに比べて、システム開発力に弱点を抱える blessing software にはうってつけの仕事だった。

……と、まあ、そういった光があれば、闇もまた生まれるもので

「だってさ、前に作ってた下請けがにっちもさっちもいなくなって放り出したものを、なんとか残骸だけ回収してとりあえず形にしたゲームなんて、全然、まったく、これっぽっちも売れる気がしないんだけど」

「言っちゃ駄目それ一つも指摘しちや駄目えええ〜！」

「そもそも、会社立ち上げて最初の仕事がサルベージとか、こんな達成感のない仕事やってたら、みんな擦り切れちゃわないかなあ？」

「駄目って言ってるのにい……」

先述の通り、触れ込みだけはやたらと景気のいいこのプロジェクトは、よくよく話を聞いてみるとそれはもう熱々の鉄火場だった。

システムの方は既実績のあるゲームを使い回……参考にして構築したため大きな問題はなかったが、絵と文章をそれぞれ外注した先の会社が、片や夜逃げし、片やクオリティが製品レベルに達しておらず。

結局、倫也たちの会社に話が来た段階で、サービス開始予定“から半年過ぎた”時期であるにもかかわらず、ほぼ素材が何もない状態で。

「しかも、こんな危ない仕事をやるために、前々からやってた企画を止めちゃうなんて……」

ちなみに、『株式会社 blessing software』は、実は今年の初めまで、オリジナルアドベンチャーギャルゲーを鋭意製作中だった。

ホームページで商業化を告知し、初タイトルのキービジュアルも公開し、それなりの数のファンから結構な期待を寄せられていた。

それが、このサルベージを請けたことで開発はストップ。更にこのサルベージ仕事については、クライアントとの守秘義務のため告知することもでき

ず、今年の春辺りからホームページの更新が止まり、どの媒体からも新たな情報が出てこなくなるにつれ、資金繰悪化説や夜逃げ説、あるいはクリエイターの引き抜き説がまことしやかに囁かれるようになり……

「だからそれは何度も説明したじゃん。この仕事が終わったら、今度はその、前進めてたやつを出させてもらってマルズと約束……」

「それだよ倫也くん」

「どれだよ恵く……いや、それだって何度も説明したじゃん。マルズとはもう何のわだかまりもないし、いい関係を築けてるって」

ちなみにちなみに、この凄絶たる鉄火場を用意したクライアントの名はマルズ。

関西に本社を置く、大手ゲームメーカーで、代表作はそれこそ枚挙に暇がないが、まあ敢えて一つ挙げるとすれば、大作 RPG の『フィールズクロニクル』シリーズで。

ちなみに株式会社 blessing software も、このメーカーとは同人時代からそこそこ因縁浅からぬ間柄で……

「けれど、わざわざマルズに頼ることもなかったんじゃないかなあ？最初の計画通り、うちのブランドで売っていけば……」

『それこそ自分たちの立ち位置を弁えない無謀な判断だよ加藤さん』

「……っ」

「あ」

「あ」

「あ」

ちなみにちなみにちなみに、元々、マルズからのこの仕事を持ち込んで来たのは、社長（倫也）でも副社長（恵）でもなく……

『いいかい加藤さん？誰もが知っている通りマルズは超大手だ。それはとりもなおさず、営業も販売も、僕たちとは比較にならない規模とネットワークを持っているということさ。これを利用しない手はないよ。だいたい、僕たちみたいな弱小メーカーが営業も販売も独自ルートで開拓してなんてやってたら、それこそすぐに疲弊してしまう。まずは大樹の影で十分に根を伸ばしていくべきだと思うんだけどどうかな？』

「……別に波島君の意見は聞いてないんだけどなあ」

「め、恵……？」

「あ〜あ……」

「やっぱり始まっちゃいましたね……」

という訳で、その、なりふり構わず業務拡大に辣腕を振るうヒラ取締役と、常に社長のための思い身の仗合った成長戦略を示す副社長との対立は、それこそ同人サークル時代からのこの社のお家芸となっており。

……ちなみ他の社員（社長含む）は、誰もが両方の派閥に所属しているので、この社内抗争に決着がつくことはない。

『確かに今回のプロジェクトは僕たちにとって達成感はないかもしれない。だが成功した時の旨味は絶大だ。今までサークルの蓄えで細々と運営してきたこの会社が、一気にのし上がるチャンスなんだよ?』

「達成感よりお金や名前が優先って考え方は歪だと思うんだけどなあ

……そういうのって、幹部社員の使い込みが発覚して経営危機に陥る会社の典型だと思うんだけど」

「いやなんかそれ喩えが微妙にずれてないか恵……？」

『まあ、同人サークルだったら加藤さんの考え方に同意だよ。けれど今の僕たちは企業だ。毎年ごとに業務計画を立て、利益を上げ、従業員の生活を保証していかなければならない。“君たちに払うお金はないけれど、やりがいのある仕事はたっぷりあるよ”なんて従業員に言い放つ経営者は醜悪だと思わ……』

「うわっ」

「あ」

「あ」

「別にそこを否定してない。それは正論じゃなくて極論っていうんだよ……」

恵の、その、少しばかり声音の弱々しい反論……

スカイプの繋がったノート PC を彼女自らが閉じてしまったため、肝心の伊織に届くことはなかった。

※

※

※

「ほら恵、残りのホットミルクもどうぞ」

「……ありがと」

「少しは落ち着いたか？」

「別に、取り乱したりした訳じゃ……」

そんな訳で、伊織がスカイプから退出(?)したタイミングで、メンバーはもぐもぐタイム……というより、恵の冷却タイムに入った。

手作りのお菓子と、温かいホットミルクを囲み、雑談に花を咲かせ、ヒラ取締役を除いた全社員で、なんとか大切な副社長の機嫌の回復に努めていた。

……まあ問題は、そのために用意した手作りのお菓子もホットミルクも、結局のところ全部副社長が一人で用意したものだという事実だけで。

「大丈夫ですよ恵さんっ！わたしたちのこと思ってくれるの嬉しいけど、まだ全然頑張れますからっ」

「本当にあたしたちのこと思ってたかなあ……」

「ごめんね出海ちゃん？みっともないとこ見せちゃって……」

「そんな！みっともないなんて全然……ただ、恵さんがあんなに真剣に食い下がるなて、ちょっとびっくりしちゃいましたけどね」

「うんうん、いつもいつも『あ～そうだね～』じゃないんだね～」

「……それ何年前のわたしの話かな氷堂さん」

ついでに、せっかくの冷却タイムにもかかわらず、結局話題になるのは、さっきの言い争い……いや経営会議の内容についてだったりして。

「まあ、本当に申し訳ないと思ってるよ。本当は社長の俺が、そういう会社方針についてとか、もっと真剣に考えて、皆にしっかり共有しなくちやならないんだけど、そういうの、いつも恵と伊織に任せっきりで……」

「倫也くん……」

「ま、しょうがないって。何しろ加藤ちゃんと波島兄ちゃんは、この会社

以外に逃げ場がないもんね～」

「え……」

「お、おい……」

「み、美智留さん、それは……」

しかし、伊織がいなくなったところで、恵の地雷を踏み抜く人間が全ていなくなったという訳ではなく……

「二人とももう大学出ちゃったから、肩書き会社役員だもんね。トモや波島ちゃんみたいに学生って免罪符もないから、会社にしがみつくしかないじゃん」

……ちなみに現時点での各メンバーのステータスは左記の通り。

安芸倫也：不死川大学四年生、兼、株式会社 blessing software 社長

波島出海：不死川大学三年生、兼、株式会社 blessing software 従業員

加藤恵：株式会社 blessing software 副社長

波島伊織：株式会社 blessing software 取締役

[参考] 氷堂美智留：ミュージシャン、兼、株式会社 blessing software 従業員(委託)

「……って冷静に考えると美智留さんが一番潰しがきかないと思うんですけど」

「ま～あたしのことは置いといてさ～、ほんっと思い切ったよね加藤ちゃん。これで会社潰れちゃったらどうすんの？ トモに貰ってもらおうとしても、その時のこいつ、借金抱えたプーだよ？」

「み、美智留っ、それは……」

「……………」

そんな美智留の言葉を受け、倫也は、多分本筋じゃない部分（貰ってもらう）にクリティカルに反応し。

そして恵は……

「……………大丈夫だよ。もう次の就職先は手配してあるから」

「恵っ!？」

「実はおじさんが静岡で会社やってて、いつでも事務で雇ってくれるって」

「ちょっとちょっとちょっとお！」

「ほらわたし、ここで office だけじゃなくて、スクリプトエンジンとか色々経験したし。そういう今までやってきたこと話したら、即戦力だって保証してくれて。なんなら今すぐにでも来ていいって」

「待って待ってだからちょっと待ってってばあああ～！」

この冷却タイムの間に、少しばかり冷却し過ぎたようだった。

※

※

※

「いや本当、恵が俺の……俺の会社のこと心配して言ってくれてるのわかるし、感謝しかないし、だからこそ恵は、この『blessing software』に絶対必要だし、恵がいるからこそ、会社のバランスが取れてる訳だし……」

「あーもう、うるさいよ倫也くん」

「ごめん……」

その後、休憩も、業務再開もつつがなく経過して……

今は、従業員（出海と美智留）たちも帰宅した社屋（安芸家）に、社長（倫也）と副社長（恵）だけが残っていた。

「だいたい、本当にそう思ってるならさ、もっとわたしの意見にも耳を貸して欲しいんだけど、さ」

「聞いてるって。恵の意見、いつも胸に刻んで……」

「その割には倫也くん、波島君の方針に傾いてるよね？ 拡大路線だよね？」

「そ、それは……えっと……」

「そこでためらうから、わかっちゃうんだよなあ……倫也くんが、わたしの言ったことを肯定してるって」

まあ、二人きりになっても、いや、二人きりになったからこそ、副社長の愚痴（ぐち）……いや会社に対する危機感は収まる気配を見せず。

「わたしの方針に、従う気がないんだって、さ」

「……ごめん」

そんなふうに、すぐ目の前で俯く倫也を、恵は正面から見据える。

しっとりとした髪、少し汗の滲んだ顔、肩から胸、そして、抱えた膝へ。

「でも、伊織がどうか、恵がどうかじゃないんだ……」

そして、その全身から漂わせる気配だけで、恵には、わかってしまう。

「ただ、ただ、この仕事は、何が何でもやるって決めたんだ」

「どうして？」

やっぱり、目の前の彼は、自分の意には従いそうにもないのだと。

「たって、このプロジェクトはさ……」

俺たちが“あの二人”に至るための、最短距離だから」

そして恵は、またしても思い知る。

今の敵なんか及びもつかない、本当の、同志にして（英梨々）、ライバルたち（詩羽）の、存在を。

「どんなに細く険しくても、間違いなく、この道が最速だから」

彼の中に残っている、深い傷跡にして、大きな宝物。

「……もしその道から転げ落ちたらどうするの？ 諦める？ 会社畳む？」

「いいや、何度でもチャレンジする」

「借金抱えたブーってやつに、なっても？」

「まあ、結果として遠回りになっちゃうかもしれないけど……それでも、今日の前にある、最速の道を諦めたくない」

その宝物を前にして、どうしても理性的になれない、自分の宝物の愚かさ

を。
「えっと、だから、その……もしかしたら、一度は、潰れちゃうかもしれないけど、でそ、そうなっても絶対に再起するから、だから、さ……」

「……あ～、わかってるから。社長が諦めたって言わない限りは、辞めないから」

「ありがとうございますううう～！」

そして、そのガラクタミみたいな宝物を、決して手放そうとしない、自分の愚かさを。

「ほんと、男の子って、さ……」

「いやもう男の子って年じゃないんだけど」

ため息混じりに恵が立ち上がると、ざあっという水音が辺りに響く。

「もう出るの？」

「身体洗うだけだよ」

「……俺が洗ってあげようか？」

「えっち」

「いや、けど……」

※

※

※

「一緒に風呂入ってる時点でえっちも何もあったもんじゃないじゃんね～！」

「しっ！声が大きいですよ美智留さん！」

……そんな、二人が語らう風呂場の窓のすぐ外で、つい先ほど帰宅したはずの従業員二人が微妙な表情で佇んでいた。

「結局加藤ちゃん、トモと別れる気微塵もないじゃん。これだからあの副社長の言葉は信用できないんだよ～」

「そんなのわかりきったことじゃないですか～。それよりも今は、この事態をどうするか考えないと！」

「いつまで風呂でいちゃついてんのよあの二人。こっちはただ忘れ物取りに戻っただけなのに、これじゃいつまで経っても入れないじゃん……」

「呼び鈴押しても全然気づかないですしね……」

「ほんとと、だったら合鍵返せって言いたい！」

「このことがバレたら、一生返してくれなさそうですけどね……」

(了)